

請 願 書

| | | | |
|-----------|---------------------------------|-----------|-----------|
| 請 願 番 号 | 第 1 8 号 | 受 理 年 月 日 | 令和4年12月5日 |
| 請 願 者 | 住 所 ○○○○○○○○○○○○○○ 代表者 大谷 貴子 | | |
| 紹 介 議 員 | 井上 智則、樋口 敦 | | |
| 付 託 委 員 会 | 健康福祉常任委員会 | 結 果 | 採 択 |

- 1 件 名 若年がん患者のターミナル在宅療養支援の実施を求める請願書

- 2 要 旨 若年の末期がん患者に対する在宅サービス（訪問介護、訪問入浴介護、福祉用具の貸与及び購入）の利用について、補助等の負担軽減のための事業を行うこと。また、必要な在宅医療及び在宅サービスが適切に提供されるよう、医療機関及び介護事業者との連携強化に努めること。

- 3 理 由 人生の最終段階を住み慣れた環境で家族と過ごしたいというのは多くの市民の願いである。2021年に日本財団が高齢者を対象に行った調査では、回答者の6割が「自宅での看取り」を望んでいる。終末期を迎えるのがより若い世代である場合でもこの願いに変わりはない。さらに、若い世代であれば、子どもがいる場合には年齢が小さいことも想定される。そのような理由もあり、実際に自宅で過ごすことを望む方も少なくないが、それが制度上難しいこともまた事実である。
「AYA世代 (Adolescent and Young Adult 思春期・若年成人)」とも呼ばれる20歳から40歳の若年がん患者が終末期を迎えた場合、国の介護保険によるサービスは受けることができず、福祉用具のレンタルや訪問介護などのサービスの利用により、高額な費用負担が発生する。その費用は、独自の若年がん患者ターミナル在宅療養支援事業を実施しているさいたま市の試算によれば毎月14万円にもなるとされ、金銭的理由から終末期を家で過ごすことを諦めざるを得ない市民が生まれていることは想像に難くない。
このようなことを踏まえれば、本人が望む環境で、残された時間を、家族をはじめとした大切な人と安心して暮らせる選択肢を提供するため、若年がん患者を対象とした終末期の在宅療養支援を行う必要がある。以上のことから、上尾市として補助等の負担軽減などに取り組むことを求める。